

## パウロは一体何者か、アポロは一体何者か

コリントの教会は大都会の教会らしく賜物に恵まれた教会であったが、同時に使徒パウロをもっとも悩ました問題の多い教会の一つであった。彼が重大な関心をもって取り扱った教会の第1の問題は、党派心にもとづく教会内の争いであった。「私はパウロにつく」「私はアポロにつく」「私はケファ(ペトロ)につく」、「いや私はキリストにつく」と、信徒たちが特定の指導者たちとのつながりを強調して互いに分派を形成して自らの権威と正統性を主張しあい教会内に仲間割れが生じていたのである。このようなコリント教会の分派争いは、今日の私たちに、そもそも教会とは何か、ということに関して大切な教訓を教える。

教会とは、本質的に「主イエス・キリストとの交わり(コイノーニア)」であって(1:9)、ある特定の人間を中心とした交わりではないし、また、その人間(たとい彼がどんなに優れた指導者であったとしても)と交わることによって成り立つものでもない。神の恵みによって選り分けられ、救い主イエス・キリストに人格的、生命的に一体とされるというところに教会の本質がある。したがって、教会の中心はいかなる意味でも人間にあるのではなくキリストご自身にあるのである。

それゆえ、「私はパウロに」「私はアポロに」「私はケファに」というように、ある特定の人物(指導者)を高く祭り上げ、その人と連なっていることを名誉とし誇りとし、また、そうすることによって自らを権威ある者とし自らの正統性、優越性を主張しようとするようなことは教会の本質から遠く離れたことである。そして、私たちに常にもそのような弱さがあり傾向があるのである。つまり、人間的なものをあがめようとする心、人間的なものに価値と名誉を求め、それを誇ろうとする誤った態度である。

私は或る本の中で、日本のある著名な大学の教授にまつわる興味ある話を讀んだことがある。その人は、百年に一人しか出ないとまでいわれた、かのスイスの大神学者カール・バルトから洗礼を受けたそうであるが、日本広しといえども、この大先生から洗礼を受けたのは自分ひとりである、と言って常々得意げに語っていたという。これもまた、肉なる人間をあがめ、人間的なつながりを誇る人間の弱さの表われであると言えよう。

パウロは一体何者か！ アポロは一体何者か！ ペテロは一体何者か！キリストはいくつにも分けられたのか、パウロはあなたがたのために十字架につけられたことがあるのか、それとも、あなたがたはパウロの名によってバプテスマを受けたとでもいうのか、とパウロは問いかける。キリストにのみ属する栄誉と誇りをなぜ人間に帰するのか！と、パウロはコリントのキリスト者をたしなめるのである(13節)。

教会(エクレシア)とはキリストがその中心であり土台であって、キリストとの生命的人格的交わり(コイノーニア)が常に第1とされ、キリストのみがあがめられるべきであって、いかなる意味でも人間があがめられてはいけないのである。人間崇拜ほど教会の本質から離れたものはないのである。私たちの群が常にキリストを崇め賛美する教会であるようにと心から願う。